産直生産者2,500人と取り組む、みやぎの復興と「食のみやぎ復興ネットワーク」

文：みやぎ生協　産直推進本部事務局長　沼沢美知雄（ぬまざわ みちお）

100を超える団体で、みやぎの「食」を取り戻す

東日本大震災の直後から、みやぎの産直生産者が先頭に立って復興に取り組もうと、炊き出しを行なったり、物資を被災地に届けたり、津波の被害に遭った田んぼの代わりに200haもの新規作付けをしたり、多くの取り組みを進めてきました。

現在は、さらに一歩進めて100を超える団体で「食のみやぎ復興ネットワーク」を結成し、食産業とその関連産業を助け合いながら復興させようと取り組んでいます。このネットワークのもとに、30を超えるプロジェクトがつくられました。「白菜プロジェクト」という、全農みやぎとみやぎ生協が呼び掛けたものもあります。被災地を含めた県内各地で8月に白菜の種をまき、高校生や生協組合員が白菜を使ったレシピなどを考え、生産者と消費者が一緒になって盛り上げようというものです。さらに白菜を使った加工品も作る計画でいます。その他のプロジェクトでも新規商品など成果が出始め、協同の力で進めることが、こんなにも強い力を発揮するのだと実感しています。

農協も漁協も生協も一緒に、復興に取り組む

みやぎ生協の職員、みどりの農協、みやぎ仙南農協、全農みやぎの職員は、津波で壊滅的な被害を受けた南三陸町志津川にたびたびボランティアに入っています。京都生協や大阪いずみ市民生協の方たちも、何回もここに支援に来てくださっています。

志津川（宮城県漁協志津川支所）は、生カキと養殖銀サケの産直提携先としてみやぎ生協と長いお付き合いがあります。ボランティアでは、養殖用の錘（おもり）を作るなどの作業をしています。左の集合写真は7月16日のもので、私は参加していませんが、みやぎ仙南農協と宮城県漁協志津川支所の方が一緒に写っている珍しいものです。みやぎ生協の共同購入職員とその家族19人を含め、この日は、漁民と漁協職員、農協職員、全農職員の実に4団体120人がカキの養殖施設の復旧作業に取り組みました。

「もう4カ月も過ぎているのに想像を超える甚大な被害の傷跡で、すごくショックでした。実際に被災地をこの目で見ることで、多くを感じることができました」――みやぎ仙南農協から炊き出しに参加した女性職員の感想です。また、次のような言葉を残していた方もいました。

「被災された方に『おいしいよ』『遠くから来てくれてありがとう』『あなたたちに何か困ったことが起きたら、今度は私が仕事を辞めて助けに行くよ』という言葉をいただき、諦めない粘り強さ、優しさ、団結力を感じました。ボランティアに参加して本当によかったです」

震災をはねのける、協同の取り組みが確実に進んでいます。

カキの養殖施設でのボランティアの様子。

津波被害の大きかった南三陸町志津川地区（7月16日撮影）。